

景観シンポジウム 景観を活用したまちづくりのすすめ

北海道開発局事業振興部都市住宅課

北海道開発局では、いろいろな施策により各地のまちづくりを支援しています。その一環として2008年3月12日(水)に札幌エルプラザで「景観」をキーワードとしたまちづくりについてのシンポジウムを開催しました。本稿では、このシンポジウムの基調講演とパネルディスカッションについて紹介します。

基調講演

地方都市における景観法を活用したまちづくり ～長沼町における計画から実践まで～



小林 昭裕 氏 専修大学北海道
短期大学みどりの総合科学科教授
イメージで認識される景観

地域を認識できるのは「イメージ」のおかげなのです。例えば、長沼はどんなところ、美瑛は、函館は、と会話を成り立たせるのに、その地域の「イメージ」でお互いに話している。そして「イメージ」の中に景観が入ってくる。つまり、地域の持っている「イメージ」のとらえ方が、「まちづくり」というコンセンサスを形成するときに非常に重要なツールになってきます。英国にピクチャレスク庭園というのがありますが、元々は城がうち捨てられたもの、廃虚です。これが整備されて廃虚景観として評価を得ており、新しい見方を付加することによって価値を生み出してきている例となっています。このように景観というものは、まさしく認識の枠組みであって、その意味付けや枠組みは長い年月をかけて作られる文化的資源なのです。

「らしさ」が作る景観

もう一つ大事なものは「らしさ」です。その場所の持っている意味や文化、その地域の個性をどう表現するかということを基軸に置かなければいけない時代に入っています。この「らしさ」というものは瞬間にはできません。長い時間を掛けて繰り返し集積をして初めて「らしさ」になる。この「らしさ」を作っていくのは、物としてのハードの部分と、見方としてのソフトの部分、この二つを継続的に続けていかなければ、その地域の「らしさ」を作っていけないと思います。

長沼では、長沼「らしさ」、つまり自分たちの感性は何なのか、良いと思うのは何なのかということを目

分たちで考えるという、住民の目線でできるところからまず始めています。その地域を支えている人たちが、自分たちはどんな景観が好きなんだろう、長沼はどこなんだろうということを知らなければならないし、自分たち「らしさ」を外から見たときにどう感じるかを知っていることが大変大事になってきます。難しいことではありません。ただ大事なのは、やはり自分たちの目線で考えるということです。

これは言ってみれば、地域の中でのその景観に対するものの見方を育てていくことになっています。景観計画を作るということは、それだけが目的ではなくて、自分たちの景観というものを自分たちの文化として自分たちで考える、自分たちの文化的熟度を上げていく作業だと思います。

地域づくりは認識の共有化

次に大事なのは共有化です。地域づくりというのは、自分たちが今持つてる資源を後の世代にいかにつないでいくかです。やはり、協働的な取り組みがないと景観というものは次の世代にいい形で引き継ぐことができな。そして、次の世代に引き継ぐには、その地域社会の中で論議できる「場」と「仕組み」がきちり伝わっていくことが重要なのです。また、この議論は開かれてなければ、本当の意味での共有化になってこない。長沼でもここ2年間かけて「長沼の美しい景観づくり通信」というものを地域住民の方々に常に流しています。

景観づくりはそんなに急ぐ必要はありません。まず、行政と住民が目線を合わせる。例えば長沼では、地域のよい景観と悪い景観を地域の方々に見てもらう、あるいは実際に現地に行って美しい景観はどういう場所なのかということを確認することが重要です。

次に、美しい景観というものはどういうものなのか、どんな方法でやったらいいのだろうか、ひとまずある程度方向を打ち出していく。突然出てくるわけじゃなくて、やりとりを繰り返す。やりとりをすることによって、景観の共通認識、お互いが話し合うなかから共通点を見いだして、徐々に土台を作って共通項を広げていくわけです。

モチベーションを持続させる

そして、手を付けるのは、自分たちの地域の「イメージ」を左右しているところ、あるいは外から来た人が自分たちの地域のイメージを左右していると思われるところから真っ先に手を付けていく。どう手を付けたらいいかというのは「らしさ」を伸ばす方向、「らしさ」を阻害するものを削る方向でさまざまな対応を練り上げていくことになるわけです。

さらに実際に物事を始めるときには、「だれが・なにを・どうするか」を計画し、実行に移すスキームづくりが大変重要になってきます。これをやらなければ住民はただ計画をつくるだけで、やったことに対する実感が伴ってこない。スキームを実行することで初めて環境が変わるので、この変化によって自分たちの達成感が出る。達成感が出ると、さらなるモチベーションが働くことになる。長沼が次に進むのはこの段階です。市町村がまちづくりを始めるときにも、この点が重要になってくると思います。

景観とか風景を成り立たせる要素に、その地域の「歴史」があると思います。それから、その「生活」や「たたずまい」、そして農業を含めた産業の「業」があって、それらをつないでいくシステムそのものが「景観」ではないかと、そして地域の人々がきちっとその根っこを支えていくことで、揺るぎない景観ができあがってくると思います。

パネルディスカッション

シンポジウムの後半では、景観を活かしたまちづくりについてパネルディスカッションを行いました。各パネリストには、それぞれの立場から景観とまちづくりの関わりについて語っていただきました。

続ける力

田村 函館で「バル街」を運営しています。バル街というのは簡単に言いますと飲み歩きイベントで、05年に函館スペイン料理フォーラムという催しの前夜祭として始めました。バル街をやっている西部地区は飲み屋街ではなく、店も点在していて東ねるような組合もなく、そういう中で1軒ずつ口説いて歩いて、なんとか前夜祭をやってみました。結果的には、歩く



パネラー
田村 昌弘 氏
函館西部地区バル街実行委員会
実行委員

中で坂道からの夜の街の景観ですとか、建造物に気づき始めた人たちがいて、スペイン料理フォーラムそのものは大成功で、次回もまたということになりました。

なぜうまく続いているのかと考えると、スタッフがボランティアでかかわっており、それは街並みに対する思いかもしれませんが、動く原動力だということが大きいと思います。それとお店との提携が重要で、他の繁華街で始めていたら、おそらく継続は難しかったのではないかと考えています。



「気づき」から始まる

仲野 私は長沼町で農業をしながら、15年前からうちで採れた農産物とか、近くの農場のものを使ったレストランを経営しています。昨年、あるご年配のお客様から「あなたは毎日このすばらしい景観の中で仕事ができることを幸せだと思った方がいい」と言われました。私は見せるために景観づくりや環境づくりをしてきたつもりだったんですが、実は一番恩恵にあずかっているのが自分なんだと、そのとき気が付かされました。

うちでは、おいしい料理をお出しするのは当然だけど、おいしく食べられる環境づくりをしようと、スタート時から約束しながら仕事をしています。おいしく食べられる風景、楽しく住める環境づくりというのは、まさしくわれわれが住んでいる農村生活だと思っています。住んでいる私たちが気づき始め、多くの方が長沼町に来ていただけるようになればなるほど、フラワーロードを作ったり、いろんなところの手入れをしたり、あるいは納屋の色を塗り替えたり、そんな環境づくりに励んでいく農家の皆さんが増えてきました。長沼町に来てくださる皆さんに教えられて、自分たちの持つ潜在能力、豊かさというのを改めて感じる事ができました。農業者はもちろん町のみなさんもやっと長沼の持つ素晴らしさに気付いて、今行動を始めたところだと感じています。

景観はビジネスチャンス

林 増毛町の^{くにまわ}國稀酒造の林です。丸一本間家本店は資料館として使用していますが、それ以外の増毛町小学校をはじめとする歴史的建造物は実際に住民が住んでいる生活の場、もしくは教育の場であり、現役の建物



パネラー
林 眞二 氏
國稀酒造(株)代表取締役社長

なのです。特に増毛小学校などは、その保存運動によって歴史的建造物の価値というのを周りの方に理解していただいた経緯があります。

他でもそうだと思うのですが、地元に住んでいる方は地元の素晴らしさに気が付かないことが多いと思います。そして、その素晴らしさを理解していただくのは非常にエネルギーを使う仕事です。例えば、増毛小学校を会場にして、木・音・人・ふれあいコンサートというイベントを何回も開催し、そこでいかに古い歴史的な建物に価値があるか、そういう理解を住民にさせていただく作業をだいたいいたしました。

また、そういった運動の結果、増毛の歴史的建造物が建ち並ぶ「ふるさと歴史通り」にはこの7年間で4店が新しく出店しました。人が来るようになって新たなビジネスチャンスも生まれたのです。景観というのは目で見ただけでは通り一遍のことしか分かりません。景観の中に隠された文化とか伝統とかを地域の方から聞くことで、また一段と地域のファンになるのではないかと思います。

小林 フランスでは食と景観は、その根源を同じとみなしています。おいしいワインの採れるところはおいしい景観があるんだというフランスの文化です。北海道にも本当に素晴らしい食文化、景観資源があります。私はフランスのような考え方、文化もうまく取り入れていくことによって、まちづくりと景観をつなぐリンクができるのではないかと考えています。

「風の人」と「土の人」

田村 転勤で来られる方も地域の大きな資源だと思います。彼ら「風の人」は、外で見聞きしてきたものを私たち「土の人」に伝える役割があると思います。函館もそうですし増毛でもあると思いますが、ある方が非常に建物を大事にしていたんですが、その方が亡くなったとき、相続税を納めるためにその建物を壊してしまわなければならない。こういうことがずいぶん見受けられます。ある意味、税制そのものが街並みを平たくしているのではないかと、仲間と飲みながらよく議論します。そういった部分に切り込むためにも、風の人として外から来る皆さんがぜひ地域に深く関わっていただくことで、その後ろ支えとなっていただければと思います。



パネラー
仲野 満 氏
(有)仲野農園代表取締役

景観も地産・地消

仲野 われわれの住む農村の中では、景観を語るときにどうしても農家住宅ですとか、農業用の施設などが景観の中で重要な役割を果たすと思うのです。うちの倉庫は築40年の木造倉庫を移築したのですが、そのようなものが地域にたくさんあるはずですよ。そういったものを活用しながら、オリジナリティのある地域づくりというのを、建築屋さんとかわれわれ農家や行政がいろいろな立場でコミュニケーションをとりながら、地域にあった建物を考えていきたいと思っています。

田代 仲野さんがおっしゃられるように、長沼らしい住環境のあり方をどうするか、地域の方々が考えていく必要があると思っています。景観計画による行為制限について、ここ1、2年検討してきましたが、やはり自由度なり多様性を阻害してはいけないと思っており、最低限のルールに限定して決めました。色彩でしたら彩度なり明度を少し抑え、あとは形とかは好みがありますので自由な部分と考えまして、その部分を埋めるのは町民の方々の意思だと思っています。



パネラー
田代 健介 氏
長沼町総務政策課企画官

価値観から景観は生まれる

仲野 私は薪ストーブまきで育ちました。小さいころの私の家族の願いは、いつかきれいな灯油ストーブの家に住みたいというのが夢で、十数年前に念願の灯油ストーブになりました。でも最近は、薪ストーブをたきたいね、と言っています。今の豊かさは便利さではなく、薪を求めている気がします。便利できれいで合理的なものを目指してきたことで、どうも豊かさを見失っちゃったなと、最近感じたりします。

この景観づくりも、人の豊かさ、価値観の中で生まれてくるのかなと考えています。どうもわれわれ、今まで合理的にとかお金もうけとか、そんなことばかり考えているうちになにか豊かさを失っていると思います。やはり、景観づくりをみんなで考えることで、心の豊かさを取り戻すきっかけにして、農家も工業者も行政も町民も、まちの景観、それはどんな豊かさと夢があるんだ、ということをみんなで話し合っていくような場ができればもっといいなと思っています。

民間と行政の役割

林 私は小布施、豊後高田、湯布院と、いろんなまちづくりをやっている所にお伺いしましたが、なんだか言っても行政じゃないです。必ず民間で仲間を作って、とにかく突っ走る、それがまちづくりの成功の秘訣ではないかと思う感じがしています。それで、そのグループを一生懸命増毛で作っているのですが、やっぱり民間だとソフト面や情報面でなかなか手に入らないことが相当あります。行政には、そういったソフトの部分を含めて情報をいただくことをお願いしたい。システムティックにそういうものができれば、われわれにとっては非常に力強い援護射撃になるのではないかと考えています。

猿田 外から見ないと気が付かないという話もあるのですが、その地区を一番ご存知なのは地域住民だと思います。まず地域がどういうまちづくりを目指したいのかといった中で、いろいろな制度とかを組み合わせてながら具体的にこういうことをやればできるということを役所はアドバイスしていければいいと思います。



パネラー
猿田 昭治 氏
札幌市市民まちづくり局都市計画部部長

4月から札幌市景観計画と新しい都市条例を施行しますが、これでいい景観ができるというわけではありません。やっぱり地域の皆様方と話をしながら、時間をかけて作っていくものだと思います。いろいろご意見をいただいたり、話をさせていただきながら、札幌市も少しずついい景観づくりに取り組んで行きたいと思っています。

「違い」がよさになる

小林 それぞれが持っている知恵と経験をお互いに共有し合うこと、これがこれからますます大事になってくると思います。また、地域が違えば景観の受け止め方も違って当然だと思います。お互いの違いを認めながらもお互いのよさを活かしていく、あるいはお互いの知恵を借り合う、これがこれからの「景観づくり」あるいは「まちづくり」の大きな方向性ではないかという気がしました。



コーディネーター
小林 昭裕 氏